

北伝部派文献における止観

K. PHRAPONGSAK

I. はじめに

「止 (Skt. śamatha, P. samatha) 観 (Skt. vipaśyanā, P. vipassanā)」についての通常理解によると、心を一つの対象に集中させるのを「止」といい、それによって正しい智慧を起し、存在の真実の姿を観るのを「観」という。

拙論 [2007] [2009a] [2009b] では、南伝上座部文献に属する初期經典から註釈文献に至る各時代の文献を順に検討し、止観の思想的展開を見ることが出来た。本稿では、それに引続き北伝部派仏教に属する文献を対象に同様な検討作業を行い、南伝上座部仏教の伝承と比較する。そうすれば、同じ出発点から生じた両部派仏教は、止観に関してどのような共通性と差異性を持っているのかを理解することが出来る。

本稿で扱う止観が説かれる北伝部派文献は、①説一切有部 (有部: Sarvāstivādin) の文献: 「六足・発智」の七論 (紀元前 2 - 3 世紀頃 - 紀元前後)、即ち『集異門足論』『法蘊足論』『施設足論』『識身足論』『界身足論』『品類足論』『発智論』、中期論書の『大毘婆沙論』(2 - 3 世紀頃)、後期論書の世親 (Vasubandhu) の『俱舍論 (Abhidharmakośabhāṣya)』(4 - 5 世紀頃) とこれを批判して有部の正義を表明する衆賢の著作である『順正理論』(5 世紀後半)、②北伝他部派文献である所屬部派・成立年代不明の僧伽羅刹の『修行道地經』、訶梨跋摩の『成実論』(250-350 年頃) である。

II. 「六足・発智」及び『大毘婆沙論』に見られる止観

まず、「六足」の中、「施設論」には「止・観」を修習しないことは「貪・瞋・痴」が生じる原因であるが、「止・観」を修習するならば「貪・瞋・痴」を減する要因であると説かれる箇所がある⁽¹⁾。しかし、それぞれの修習に関する説明がない。止観それぞれの解釈ならば『集異門足論』に見られる。そこでは、*Nikāya* からの引用⁽²⁾に基づいて「内心止・増上慧法観」と「世間四静慮・出世聖慧」との関係を述べている。そこで、四種の人（補特伽羅：Skt. pudgala, P. puggala）が挙げられ、「内心止」を得た者は「世間四禪（静慮：Skt. dhyāna, P. jhāna）」に至った者、「増上慧法観」を得た者は「出世聖慧」に至った者であると解釈される。つまり、①「世間四禪を得たが、出世聖慧を得ない」、②「出世聖慧を得たが、世間四禪を得ない」、③「世間四禪及び出世聖慧を得ない」、④「世間四禪及び出世聖慧を得た」という四人が存在する⁽³⁾。この部分は南伝の *Puggalapaññatti* においても同様に説明される。ただし、相違点は『集異門足論』では「四禪」のみ説かれるが、*Puggalapaññatti* では「四禪」のみならず「無色定」まで説かれる⁽⁴⁾。②から見れば、両部派は「世間四禪」を得なくても「出世聖慧」が得られることを認めると見られる。南伝上座部ならば、註釈文献では、*upacārasamādhi*（近行定）及び *khaṇikasamādhi*（刹那定）を四禪の前段階として解釈しているが、北伝では南伝と同じようなものがあるであろうか。先に言えば、有部の『大毘婆沙論』では四禪の前段階である「未至定・近分定」が説かれる。ただし、その解釈は南伝と同じなのか、それとも異なるのかに関しては次のように考察していこう。

まず、『大毘婆沙論』81結蘊においては「止・観」と「近分定・根本静慮（四禪）・無色定」との関係は以下のように説明される。⁽⁵⁾

復次根本静慮現在前時。長養大種遍身中生令身充悦故名樂住。近分定等

現在前時。長養大種唯心邊生。非極充悅故非樂住。有作是說。近分定等現在前時。長養大種雖遍身生。而長養用不及靜慮現在前時長養大種故非樂住。譬如二人同一池浴。一身入水。一用手澆。雖俱洗浴而入水者潤益為勝非手澆者。復次四靜慮中止觀力等故名樂住。近分定中觀強止劣。無色定中止強觀劣俱非樂住。（大正27.420a）

この『大毘婆沙論』の第一説によれば、「四禪」が大種を長養する働きは、遍身に及ぶので「樂住」と呼ばれるに對し、「近分定」などの働きは、心にしかならないため「樂住」ではないとされる。第二説では、「近分定」と「四禪」との譬喩が示され、「近分定」は手で身体に水を注ぐことに、「四禪」は身体全体を池にひたし入浴することに喩えられている。つまり、「定」の深さで言えば「四禪」は「近分定」より深くなる。さらに、「四禪」は「止・觀」の力が平等であるために「樂住」と名づけられる。一方「近分定」は「觀」の力は勝るが、「止」の力は劣る。「無色定」は「止」の力は勝るが、「觀」の力は劣る。したがって、兩者とも「樂住」とは呼ばれない。「無色定」は「四禪」より深くなるが、「近分定」と同様に「樂住」ではない。ここでは、「定」が深ければ深いほどすぐれるとは言えず、止と觀とのバランスをとるのが重要であると有部は強調している。⁽⁶⁾

また、これらの「定」によって「四通行」を區別する記述が『大毘婆沙論』94智蘊にある。

有作是說。苦遲通斷。是未至定靜慮中間三無色定。時解脫聖道攝。苦速通斷。即是彼地諸聲聞乘。不時解脫聖道攝。樂遲通斷。是四根本靜慮。時解脫聖道攝。樂速通斷中不能正顯廣大饒益天人眾者即是四根本靜慮。諸聲聞乘不時解脫聖道攝。樂速通斷中。能正顯示廣大饒益天人眾者是佛乘聖道攝。（大正27.485b）

と説かれる。「四通行」とは、①苦しく修行して遅く悟る「苦遲通行」、②苦

しく修行して速く悟る「苦速通行」、③楽に修行して遅く悟る「楽遅通行」、④楽に修行して速く悟る「楽速通行」である。①及び②は「未至定・静慮中間・無色定⁽⁷⁾」を通じて修行する。一方、③及び④は「四根本静慮」を通じて修行する。つまり「四禪」以外を通じて修行すれば「苦行」といい、一方「四禪」を通じて修行すれば「楽行」ということになる。

「未至定・静慮中間・近分定」という「定」は、北伝でも有部以外の他部派に見られないから、有部特有の思想であると思われるが、南伝上座部にも対応する「定」が見出される。

まず、「尋 (Skt. vitarka, P. vitakka)」のないものであり、初禪と第二禪との間に位置するとされる有部の「静慮中間」は、上座部の *Abhidhamma* における「五禪」の「第二禪」に相当する⁽⁸⁾。*Nikāya* においては、通常通り「四禪」が説かれるが、*Abhidhamma* の時代に入るとその「四禪」の初禪と第二禪との間に「尋」のない「第二禪」が挿入される。「五禪」の第三禪から第五禪が「四禪」の第二禪から第四禪である。

次に、「近分定 (sāmantakasamādhī)」は、上座部の註釈文献における Upatissa の *Vimuttimaggā* 及びこれを底本とした Buddhaghosa の *Visuddhimaggā* では upacārasamādhī (近行定) と呼ばれる⁽⁹⁾。有部の「近分定」は『大毘婆沙論』以後に初めて見られるようになったが、上座部の upacārasamādhī は *Vimuttimaggā* において初めて現れる。そして「四根本静慮」は「四禪」そのものであり、上座部の註釈文献においては appanāsamādhī (安止定)⁽¹⁰⁾ と呼ばれる。最後に、ここで注目したいのは、上座部の註釈文献に現れる upacārasamādhī より下位の khaṇikasamādhī (剎那定) である。有部と北伝他部派には、これに繋がる術語や思想などが見られない為、この khaṇikasamādhī は南伝上座部特有の思想であると言える。

以上、有部の「静慮中間」と上座部の「五禪の第二禪」は、両方とも初期論書の時代に入ってから成立したと考えられる。そして、有部の「近分定・根本静慮」と上座部の upacārasamādhī・appanāsamādhī に関しては、有部は中期論書の『大毘婆沙論』から見られるが、上座部は註釈文献の

Vimuttimaggā から現れる。ただし、両書の成立年代から見れば2-3世紀頃なので、これらの術語もほぼ同じ時代に成立したと考えられる。両部派の「定」に関する思想には、親密な共通性が存在する。ただ術語のみ異なっているが、内容的には同様である。これらの思想は、上座部が有部から受け入れたのか、逆に有部が上座部から受け入れたのか、それとも両部派がそれぞれ独自に展開させたのか、この段階ではまだ断定できないが、ここで言えるのは、これらの術語が阿含・*Nikāya* から受け継がれたものではないということである。

さらに、また上座部の註釈文献では、上述の「定」によって二種の行者に分類される。つまり、*khaṇikasamādhī* か *upacārasamādhī* かに至る *vipaśsanāyānika* (観行者) と、*appanāsamādhī* に至る *samathayānika* (止行者) である。ここから有部にこのような思想があるか否か、考察したい。

その手懸りとして、『大毘婆沙論』94智蘊において、智慧第一の舍利子と神通第一の大目連との修行の記述が以下のように説かれる。

問何故舍利子與大目連。俱依未至定入正性離生得果離染。而舍利子依第四靜慮得阿羅漢果。大目連依無色定得阿羅漢果耶。答此二尊者。俱是到究竟聲聞故。決定漸次得四沙門果。是故俱依未至定入正性離生。而尊者舍利子。是毘鉢舍那行故。依第四靜慮得阿羅漢果。尊者大目連。是奢摩他行故。依無色定得阿羅漢果。(大正27.485c-486a)

ここで、舍利子は「観行(毘鉢舍那行: *vipaśyanācarita*)」を修習し「第四禪」に依って阿羅漢果を得たが、大目連は「止行(奢摩他行: *śamathacarita*)」を修習し「無色定」に依って阿羅漢果を得たと説明されている。前述の「四通行」から見れば、舍利子は「樂行」で修習したが、大目連は「苦行」で修習したと言える。この両尊者と四通行との区別は、*Nikāya* にも見られ、そこで大目連は「苦速通行」であるが、舍利子は「樂速通行」であると説かれている。⁹⁰⁾

以上、有部の「止行」の行者は「四禪」のみならず「無色定」にまで至るが、「観行」の行者は「四禪」に至る行者である。また、有部の *śamathacarita*・*vipaśyanācarita* は、上座部の *samathayānika*・*vipassanāyānika* に近似するが、内容はかなり異なっていると見られる。つまり、有部の *śamathacarita* は「四禪」を越えて「無色定」に至る行者であるが、上座部の *samathayānika* は *khaṇikasamādhī* と *upacārasamādhī* を越えた *appanāsamādhī* である「四禪」に至る行者である。一方、有部の *vipaśyanācarita* は「未至定」を越えた「四禪」に至る行者である。この点から見れば、有部の *śamathacarita* と *vipaśyanācarita* とは共に「四禪」に到達しなければならぬので、有部の止観の修習は「四禪」を必要としたと見られる。

最後に、『大毘婆沙論』における「止・観」と「五蓋」を考察する。「五蓋」と「戒・定・慧」と「止・観」との関係は、『大毘婆沙論』48結蘊において以下のように説かれている。

復次貪欲令遠離諸欲法。瞋恚令遠離諸惡法。惛沈睡眠令遠離毘鉢舍那。掉舉惡作令遠離奢摩他。彼由遠此離諸欲惡法及毘鉢舍那奢摩他故。便為疑箭惱壞其心。為有諸惡不善業果。為非有耶⁰³。因斯造作種種惡業。是故偏立此五為蓋。復次貪欲瞋恚破壞戒蘊。惛沈睡眠破壞慧蘊。掉舉惡作破壞定⁰³蘊。彼由破壞此三蘊故。便為疑箭惱壞其心。為有諸惡不善業果為非有耶⁰³。因斯造作種種惡業。是故偏立此五為蓋。復次貪欲瞋恚障礙戒蘊。惛沈睡眠障礙慧蘊。掉舉惡作障礙定蘊。…。(大正27.250a)

これによれば、「貪欲」と「瞋恚」はそれぞれ「離諸欲法」と「離諸惡法」を遠ざけ、「戒蘊」を破壊あるいは障害する。「惛沈睡眠」は「観」を遠ざけ、「慧蘊」を破壊あるいは障害する。「掉舉惡作」は「止」を遠ざけ、「定蘊」を破壊あるいは障害する。ここで、通常の「戒・定・慧」とは順番が異なっている点が注目されるが、これは後に示すように、世親と衆賢との論争のテ

paśyanā samatābhyām ayatnavāhitvāt |

duḥkhā 'nyabhūmiṣu |

anyāsv anāgamyadhyānāntarārūpyabhūmiṣu mārgo duḥkhā
pratipad aṅgāparigrahāc chamathavipaśyanānyūnatvāc ca yatnavā-
hitvāt śamathanyūne hy anāgamyadhyānāntare vipaśyanānyūnā
ārūpyā iti | (AKBh.⁰⁰382)

道が、即ち、行道（通行）と呼ばれる。〔道は〕涅槃に行かせるからである。行道は四つである。〔1〕苦難な行道であって通智の遅いものがある。〔2〕苦難な〔行道〕であって通智の速いものがある。〔3-4〕楽な〔行道〕も同様に二種である。それらの中で、

静慮における道は楽な行道である。

四静慮における道は楽な行道である。〔行者は、静慮〕支による支えと止・観が平等であることによって労苦を伴わずに進むからである。

他の地における〔道〕は苦難な〔行道〕である。

他の未至〔定〕・静慮中間・無色〔定〕の諸地における道は苦難な行道である。〔静慮〕支によって支えられないことにより、そして〔行者は〕止・観〔のどちらか〕が劣ることにより、労苦を伴って進むからである。というのは、未至〔定〕と静慮中間とは〔観が優れて〕止が劣り、無色〔定〕は〔止が優れて〕観が劣るから。

ここで「大毘婆沙論」と同様に、「四禪」において止と観とのバランスをとる「止観平等」は「樂行」である。⁰¹⁹一方、これ以外の「未至定・静慮中間・無色定」は「苦行」であり、「未至定・静慮中間」は「観」が優れて「止」が劣るが、「無色定」は「止」が優れて「観」が劣るからであると説明している。そして、

sa dhyāne vyavakīrṇo 'kaniṣṭhagaḥ || 37 ||

⁰¹⁸ūrdhvasrotā dvividho hetutaḥ phalataś ca | hetuto vyavakīrṇāvya-

vakīrṇadhyānatvāt | phalato 'kaniṣṭhabhavāgraparamatvāt | tatra⁰⁷
 yena dhyānaṃ vyavakīrṇaṃ so 'kaniṣṭhān gatvā parinirvāti |
 (AKBh.359)⁰⁸

〔上流である〕彼は、静慮を雑修すれば、色究竟〔天〕へ往く。上流は、因と果よりして二種である。静慮を雑修する者と雑修しない者とがあるから、因よりして〔二種である〕。〔雑修する者は〕色究竟〔天〕を最上としてそこに般涅槃する者〕であり、〔雑修しない者は〕有頂〔天〕を最上と〔してそこに般涅槃〕する者であるから、果よりして〔二種である〕。ある〔上流〕がこ〔の世〕において静慮を雑修するならば、彼は〔死後に〕色究竟〔天〕に往って般涅槃する。

と説かれる。ここで「不還果」を得た後に涅槃に入る「上流」は「四禪」を雑修する者と雑修しない者との二種の行者に分けられる。「四禪」を雑修する者は、死後に「色究竟天」に往って般涅槃する。そして、「四禪」を雑修しない者は、死後に「有頂天」に往って般涅槃する。この「四禪」を雑修しないというのは、ただ「四禪」を雑修するのみならず、これを超越する「無色定」まで雑修するのである。それは以下のように説かれている。

anyo bhavāgragaḥ |
 avyavakīrṇadhyāna ūrdhvaṃsrotā bhavāgra niṣṭho bhavati | sa hi
 samāpattyantarāṇy āsvādayan sarvasthānāntareṣūpapadyāpravi-
 śyaiva śuddhāvasān ārūpyakramotpattito bhavāgraṃ gatvā parinir-
 vāti | śamathacarito hy eṣaḥ | pūrvakas tu vipaśyanācaritaḥ |
 (AKBh.360)⁰⁹

他〔の上流〕は有頂〔天〕に往く。
 静慮を雑修しない上流は有頂〔天〕を究極と〔し、そこで般涅槃〕する。なぜならば、彼は他の諸等至（四静慮以外）に味着し、〔この世を去って〕他のすべての〔色界〕処に生まれるが、淨居〔天〕には決して入ら

ず、〔色界を去って〕無色〔処〕に順次に生まれた後、有頂〔天〕に往って般涅槃するから。こ〔の上流〕は止を行ずるが、先の者は観を行ずる。

ここで「止行」は「四禅・無色定」を雑修する者であり、「観行」は「四禅」を雑修する者であると説かれている。

以上、①②③は『俱舍論』においても『大毘婆沙論』から受け継がれ認められていることが明らかになった。しかし、④「止観と五蓋」については認められずに別説が紹介される点がある。この④に関して『俱舍論』には世親の別説があるが、有部の正統派と言われる衆賢は『順正理論』でまたそれに反論している。まず、世親の別説は以下ようになる。

kāmacchandavyāpādābhyāṃ śīlaskandhavidhātāḥ | styānamiddhena prajñāskandhasya uddhatyakaukr̥tyena samādhiskandhasya samādhiprajñayor abhāve satyeṣu vicikitsako bhavatiṭy ataḥ pañcoktāni | etasyāṃ tu kalpanāyāṃ samādhiskandhavirodhina uddhatyakaukr̥tyanivaraṇasya pūrva grahaṇaṃ prāpnoti | ato yathāsaṃkhyam etābhyāṃ samādhiprajñāskandhopaghāta ity apare | samādhiprayuktasya hi styānamiddhād bhayaṃ | dharmapravicaya⁰⁰prayuktasya uddhatyakaukr̥tyāditi | (AKBh.319)

食欲と瞋恚とによって戒蘊が損なわれる。惛沈睡眠によって慧蘊が、掉挙悪作によって定蘊が〔損なわれる〕。定と慧とを欠くと、〔四〕諦について疑う者となる。よって五つ〔の蓋が〕説かれたのである。しかし、そのような解釈では、掉挙悪作蓋は定蘊と対立するから、〔慧蘊と対立するとされる惛沈睡眠蓋よりも〕先に言及す〔べきである〕ということになる。ゆえに、順序通りにこれら（惛沈睡眠蓋と掉挙悪作蓋）によって、定〔蘊〕・慧蘊が損なわれるのである、と別の人々は〔言う〕。定を実修する者は惛沈睡眠を恐れ、択法を実修する者は掉挙悪作を〔恐れる〕からである。

ここで『大毘婆沙論』にも見られたように、「惛沈睡眠」が「慧蘊」を損ない、「掉挙惡作」が「定蘊」を損なうと有部は主張する。これに対して世親は、「惛沈睡眠」が「定蘊」を損ない、「掉挙惡作」が「慧蘊」を損なうと主張し、「戒→定→慧」の順に挙げるべきであるとする別説を紹介している。この説の根拠は、「定」を実修する者は「惛沈睡眠」を恐れるため「惛沈睡眠」は「慧」でなく「定」を損なう、一方「慧」を実修する者は「掉挙惡作」を恐れるため「掉挙惡作」は「定」でなく「慧」を損なう、というものである。

これに対し、衆賢は『順正理論』において次のように反論している。

謂貪恚蓋能障戒蘊。如次令遠離欲惡故。惛沈睡眠能障慧蘊。此二俱令遠毘鉢舍那故。掉舉惡作能障定蘊。此俱令遠離奢摩他故。如是四蓋漸次令超出離白法。由此於後令於業果四諦生疑。疑故能令乃至解脫解脫智見皆不得起。故唯此五建立為蓋。若爾掉悔蓋應惛眠。前說順戒定慧蘊。次第而說故不爾。此中壞次第者。世尊意欲顯別義故。謂契經中佛依正理說惛眠蓋毘鉢舍那能治非止。說掉悔蓋唯奢摩他能治非觀。此依伏斷說觀止門。別治惛眠掉悔二蓋。若依永斷此觀止門對治一切用無差別。為顯此理故壞次第。(大正29.649a)

と解釈している。まず、ここで衆賢は五蓋を断じることには「伏断」と「永断」があるから、先に「惛沈睡眠」を治めるために「慧」が必要とする。次に、「掉挙惡作」を治めるために「定」が必要とするのは「永断」でなく「伏断」である。必ずしも「定→慧」の順だけに限らないと解釈している。そして、二番目の観点に関しては、以下のように解釈している。

然契經說。修等持者怖畏惛眠。修擇法者怖畏掉悔。此言意別。謂惛眠蓋相順等持。欲修等持惛眠易起。故修定者怖畏惛眠。非謂惛眠近能障定。怖畏掉悔准此應知。若謂契經作如是說。心昧劣位修定非時。心輕躁位修

慧非時。故知惛眠近能障定。掉悔障慧理必應然。理亦不然就近說故。謂此經意正說惛眠。於法相中不能簡擇。是故擇法為彼近治惛眠。亦能近障擇法。故味劣位修定非時。定非惛眠近對治故。惛悔於慧准此應知。(大正29.649a-b)

ここで「等持」を修習するときに「惛沈睡眠」が起りやすいため「定」を修習する者は「惛沈睡眠」を恐れるという意味であり、「惛沈睡眠」が「定」に障るという意味ではない。一方、「択法」を修習するときに「掉挙惡作」が起りやすいため「慧」を修習する者は「掉挙惡作」を恐れるという意味であり、「掉挙惡作」が「慧」に障るという意味ではない、と世親の別説に反論する。

最後に、⑤「止観と修行法」に関して考察する。この記述は、初期・中期論書には見られないが、後期論書の「俱舍論」賢聖品には見られる。つまり、ここでは止観の具体的な修行法を説いているのである。まず、賢聖品の構成について考察しよう。

賢聖品の構成を一言で要約すると「断惑（煩惱を断つ）の道を説くのであり、それは (i) 道への最初の出発たる予備段階、(ii) 聖道に入る準備としての順解脱分（三賢）・順決択分（四善根）、(iii) まさしく断惑する過程としての聖道（見道・修道・無学道）という順序で説示されている」というものである。(i)「修習の予備段階」では、行者はまず持戒を実践し、教えを聞いてそれを受け取り、その意味を誤りなく思惟して三昧を修行する。つまり、聞所成の慧 (śrutamaya-prajñā) によって思所成の慧 (cintāmayā-prajñā) が生じ、思所成の慧によって修所成の慧 (bhāvanāmayā-prajñā) という「三慧」が生じる。(ii)「聖道に入る準備としての順解脱分（三賢）・順決択分（四善根）」では、心身遠離と少欲知足を實踐し、三賢・四善根という無漏の聖道に入る前の修行段階を修習する。(iii)「断惑する過程としての聖道」では、凡夫の有漏の智慧である世第一法 (laukikāgratā) の直後に、聖者の無漏の智慧である見道 (darśana-mārga) に入って預流向と

なる。八忍八智の十六心刹那を修習し、最後の十六心刹那である道類智 (mārgānvaya-jñāna) によって修道 (bhāvanā-mārga) に入り、預流果と呼ばれる。その後、一來向・一來果・不還向・不還果・阿羅漢向へと進み、すべての惑を断じたとき無学の阿羅漢果が完成する。これを無学道 (aśaikṣa-mārga) と呼ぶ。

⑤「止観と修行法」は、以上の (ii)「聖道に入る準備としての順解脱分 (三賢)・順決択分 (四善根)」に説かれている。そこで「それ(修習)への進み入りは不浄〔観〕と出入息念とによる (tatrāvātāro 'śubhayā cānāpānasmṛtena ca)」という三賢の第一が説かれる。そして「不浄観」及び「出入息念」を詳細に説明する。次に、三賢の第二 (別相念住) と第三 (総相念住) を以下のように述べている。

tābhyāṃ tu samādhilabdhā

niṣpannaśamathaḥ kuryāt smṛtyupasthānabhāvanām |
vipaśyanāyāḥ saṃpādanārtham | katham ca punaḥ kuryāt |
kāyaviccittadharmāṇāṃ dvilakṣaṇaparīkṣaṇāt || 14 ||

kāyaṃ svasāmānyalakṣaṇābhyāṃ parīkṣate | vedanāṃ cittam dharmāś ca | (AKBh.341)

これら〔不浄観と出入息念との〕二つによって、三昧を獲得して

止を全うした者は〔次に〕〔四〕念住の修習をなすべきである。

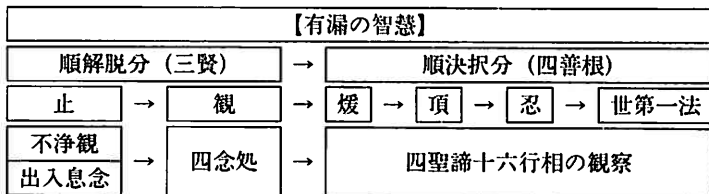
〔それは〕観を完成するためである。どのように〔四念住の修習を〕なすべきであるか。

身・受・心・法を二相によって観察することによるのである。

〔即ち〕身を自〔相〕と共相とによって観察するのである。受を、心を、法をも〔自相と共相とによって観察するのである〕。

ここでは「不浄観」と「出入息念」は「止」を完成させるためである。そして、心が対象に統一された「止」に到達した後に「観」を完成するために

「四念処（四念住）」の修習を必要とする。この「四念処」の修習は、身・受・心・法のそれぞれの自相を一々観察する「別相念住」と、身・受・心・法を一括してそれらの共相である「無常・苦・空・無我」を観察する「総相念住」とになる。その後、「煖 (uṣmagata)・頂 (mūrdhan)・忍 (kṣānti)・世第一法 (laukikāgratā)」という「四善根」の修習に入る。それは「四聖諦」を有漏の慧をもって「十六行相」において繰り返し観察するのである。以後の段階は、前述の (iii)「断惑する過程としての聖道（見道・修道・無学道）」で説示されている。



⑤「止観と修行法」に関して、上座部の *Vimuttimaggā* 及び *Visuddhimaggā* と比較してみると、この両書においては、三十八もしくは四十の「業処 (kammaṭṭhāna)」により「止」を完成させるのであるが、『俱舍論』では「不浄観」と「出入息念」により心を対象に統一された「止」に到達させるのである。この「不浄観」及び「出入息念」は、三十八あるいは四十の「業処」にも含まれている。一方、「観」を完成するため、特に有漏の「観」は、上座部では「四界差別」によるが、『俱舍論』では「四念処」によるのである。この有漏の「観」を完成する修行法には、上座部と有部との観点の相違が見られる⁹⁰。

以上、有部の諸論書における ①「止観と定」②「止観と四通行」③「止観と行者」④「止観と五蓋」⑤「止観と修行法」について考察した。その中、①②③は初期論書から後期論書へ受け継がれ認められていることが明らかになったが、④に関しては世親が有部の説を認めずに別説を紹介している点がある。これに対し、有部の正統派と言われる衆賢は「順正理論」でまたそれ

に反論している。最後に、後期論書の『俱舍論』にしか見られない⑤「止観と修行法」に関して考察した。これは、それまで指定されなかった止観の具体的な修行法を、世親が『俱舍論』で定めようとしたものと考えられる。

IV. 北伝他部派文献に見られる止観

有部以外の北伝部派文献で止観に関する記述が見られるのは『修行道地経』と『成実論』である。まず、『修行道地経』を考察していく。

『修行道地経』の内容に共通するのは、部派仏教において定型化した禅観であり、仏教禅観の特色、特に部派仏教の禅観の次第進展について述べたのが本経の最大の特徴である。⁶⁹『修行道地経』の成立年代は不明であるが、現存西晋の竺法護訳『修行道地経』と安世高訳『道地経』との漢訳年代だけを見ても、有部の中期論書である『大毘婆沙論』とほぼ同じ時代であるから、本経の成立は有部の「六足・発智」と『大毘婆沙論』との間ではなかろうかと考えられる。この成立年代から見ると、体系化された修行法の論書である有部の『俱舍論』や上座部の *Vimuttimaggā*, *Visuddhimaggā* などのうちでは本経は比較的古いものである。

では、まず『修行道地経』7巻30品の修行の構成を考察しよう。(i)「迷界の相状」：輪廻転生の中で衆生の迷いの状態を説いている。(ii)「修行道の初門」：衆生の迷いの状態に応じた5種類、即ち、情欲の盛んな者には「不浄観」、怒りの強い者には「慈心観」、真理に対して暗い者には「因縁観」、想念の多い者には「出入息念（数息観）」、驕りの強い者には「白骨観」をもって修習すべき方法に言及する。これら5種の修行法が修行への入り口とされる。(iii)「凡夫禅」：修行法には「止」と「観」という二面がある。

「止」を求めるのであれば、「不浄観」と「出入息念」を修めることが最も良い方法であるという。これによって修行者は第一禅から四禅に到達し、心の静寂な状態を得る。四禅に達したものは五神通を得て死後は生天することができると説くが、これは凡夫の禅であり、真実の解脱へと導くものではない。

いという。(iv)「仏弟子禪」：仏弟子は、このような四禪や五神通に執着せず、有漏の四聖諦を観じる四善根により真実の無漏の段階に入らなければならないとする。さらには四向四果の修行を経ることによって、最後には阿羅漢果を得ることができるという。ここに修行は完成し、仏と同じ涅槃解脱の境地に達することができるという。(v)「菩薩禪」：菩薩禪・菩薩道及び三乗を説明し、大乘菩薩は修行が完成しても一切衆生のために涅槃に入ることがないと説いている。

止観の修習次第を詳細に説いているのは、(iii)「凡夫禪」と(iv)「仏弟子禪」である。まず、神足品における止観を考察する。ここでは、

其修行者。或先得寂而後入觀。或先得觀然後入寂。習行寂寞適至於觀便得解脱。設先入觀若至寂寞亦得解脱。(大正.15.211c)

と説明している。これは、阿含・Nikāya にも見られる①「止を先行させる観」と②「観を先行させる止」との修習次第⁸⁹を述べているが、その後には、②の修習次第はどうすれば良いかを具体的に説明してない。①の修習次第のみを説いている。その具体的な修行法としては、以下のように述べている。

其修行者。何因專精求入寂然。無數方便而逮於寂。今取要言而解説之。因二事致。一惡露觀。二曰數息守出入息。(大正15.212a)

ここでは、心の寂靜に至る「止」のためには「無数の方便」があるとするが、「不淨観（惡露観）」と「出入息念」のみを述べている。つまり「止」に至る方法はただこの二方法だけではなく、数え切れないほどある。前述の「俱舍論」にも、「止」に到達するためにはこの「不淨観」及び「出入息念」が必要であると述べられているため、成立年代から見ると、本經に説かれる止観と「俱舍論」との関係が注目される。これだけではなく、四向四果に至るまでの修習次第も近似している。その考察に入る前に、他の論書に見られな

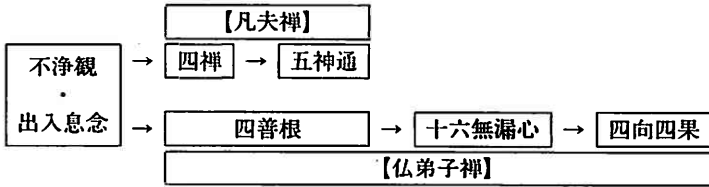
い二路の「凡夫禪」と「仏弟子禪」について考察する。

「止」に至る「不浄観」と「出入息念」の修行法を述べた後に、以下のよう
に「凡夫禪」と「仏弟子禪」を説明している。

行者所以觀出入息。用求寂故令心定住。從其寂然而獲二事。一者凡夫。
二者佛弟子。何謂凡夫而求寂然。欲令心止住除五陰蓋。何故欲除諸蓋之
患。欲獲第一禪定故。何故欲求第一之禪。欲得五通。何謂佛弟子欲求寂
然。所以求者欲得溫和。何故求溫和。欲致頂法。見五陰空悉皆非我所。
是謂頂法。何故求頂法。以見四諦順向法忍。何故順求法忍。欲得世間最
上之法。何故求世間最上之法。欲知諸法悉皆為苦。因得分別三十七道品
之法。何故欲知諸法之苦。欲得第八之處。何以故。志第八之地。其人欲
致道跡之故。(大正15.217a)

ここでは「出入息念」を修習すると「止」に至る。その後 (a)「五蓋」を
除き「初禪」に到達して「五神通」を得る。これが「凡夫禪」と呼ばれる。
一方 (b)「四善根」即ち「煖・頂・忍・世第一法」を順に得て「三十七菩
提分法」を分別すると「道諦」に至る。これが「仏弟子禪」と呼ばれる。こ
の点から見れば「修行道地經」の「止」は「初禪」に至る者も、至らない者
も認めるが、「初禪（四禪）」に至って「五神通」を得る行者は「仏弟子禪」
でなく、ただ「凡夫禪」のみにとどまっていると批判されている。その後
「仏弟子禪」の経路を、有漏の四聖諦を観じる「煖・頂・忍・世第一法」に
より凡夫地を渡って「聖道」に至る「十六無漏心」を得て、四向四果の修行
を経ることによって、最後には阿羅漢果を得ることができると説いている。
この「仏弟子禪」の修行、特に有漏の智慧である「四善根」から無漏の智慧
である「十六無漏心（十六心刹那）」への段階は『俱舍論』と共通するが、
「不浄観・出入息念」の修習の後に「四念処」でなく「四善根」に入る段階
は『俱舍論』と相違する。これは、世親が『修行道地經』に見られるような
「止」の具体的な修行法である「不浄観・出入息念」を取り入れ、さらに

「観」の具体的な修行法である「四念処」を加えて「俱舍論」で定めるようになったと考えられる。



次に、『成実論』における止観を考察する。本論では、この止観がすべての修道の根幹をなすものであり、止観を重視していることを看過することは出来ない。止と観とがどのような役目をなすかについて本論の止観品では、詳細に説かれている。特に「三十七菩提分法」の中でどれが「止」に、どれが「観」に属するかの区別に関する本論の以下の記述は、他部派文献には見出されないものである。

四憶處中三憶處名止第四憶處名観。四如意足名止四正勤名観。五根中四根名止慧根名観。力亦如是。七覺分中三覺分名止。三覺分名観。念則俱隨。八道分中三分名戒。二分名止。三分名観。戒亦屬止。(大正32.358b)

ここでは「三十七菩提分法」と「止・観」との区別が示されているのであるが、「七覚支」及び「八聖道」の区別が明確ではない。

	【止】	【観】
四念処	身念処・受念処・心念処	法念処
四神足	四神足	-
四正勤	-	四正勤
五根	信根・精進根・念根・定根	慧根
五力	信力・精進力・念力・定力	慧力
七覚支	— 明確でない区別 —	
八聖道	— 明確でない区別 —	

また、前文に引き続いて、阿含・*Nikāya*を引用して「止・観」と「心解脱・慧解脱」との関連性を以下のように示している。

又止能斷貪觀除無明。如經中說。修止則修心。修心則貪受斷。修觀則修慧。修慧則無明斷。又離貪故心得解脱。離無明故慧得解脱。得二解脱更無餘事故但說二。(大正32.358b)

最後に、「止を先行させる観」と「観を先行させる止」との止観の修習次第について、以下のように述べている。

問曰。經中說。以止修心依觀得解脱。以觀修心依止得解脱。是事云何。
答曰。行者若因禪定生緣滅智。是名以止修心依觀得解脱。若以散心分別陰界入等。因此得緣滅止。是名以觀修心依止得解脱。若得念處等達分攝心。則俱修止觀。又一切行者。皆依此二法得滅心解脱。(大正32.358c)

ここで、①「禪定」によって滅を縁ずる「智」を生じるのは「止」をもって心を修習し、「観」によって解脱を得る、②「散心をもって陰界入等を分別すること」によって滅を縁ずる「止」を得るのは「観」をもって心を修習し、「止」によって解脱を得ると説明している。つまり、①は「止を先行させる観の修習」に、②は「観を先行させる止」に相当する。ただし、ここで注目したいのは、①であれ②であれ「心を修習する」と説明しているところである。「止・観」と「心解脱・慧解脱」との関連性など通常通りであれば、「止」は「心」を、「観」は「慧」を修習すると説明しているであろう。①の場合「禪定」は「止」に、「智」は「観」に相当するので、この「観」は「無漏の観」であると見られる。一方、②の場合「散心を以って陰界入等を分別すること」は「観」に相当する。この②の「観」は「智」ではなく、①の「観」と異なるものであると見られる。さらに、本論の三慧（聞慧・思慧・修慧）から考えれば、この「分別」は、思惟から成る「思慧」であり

「有漏の観」に相当する。つまり「止」の前段階になる「観」であると思われる。

この両者の止観の修習次第は、阿含・*Nikāya* に見られるが⁹²、詳細に説明されていない。この両者の解釈に関して、南伝上座部は、経と論との中間時代で成立した *Paṭisambhidāmagga* で初めて明確化したと考えられる。一方、北伝では、成立年代から見ると、まず『修行道地経』に見られるが、ただ阿含・*Nikāya* を引用しただけで、詳細な解釈は見られない。初めて明確化したのは、この『成実論』ではなかろうか。

V. ま と め

以上、北伝有部文献に属する初期から後期に至る各時代の論書及び北伝他部派文献を順に考察し、南伝上座部仏教の伝承と比較した上で、両伝承は、止観に関して共通性と差異性を持つことを明らかにした。以下にその結論をまとめる。

1. 有部の初期・中期論書である「六足・発智」と『大毘婆沙論』における止観の記述を考察すると、①「止観と定」②「止観と四通行」③「止観と行者」④「止観と五蘊」が見られる。①②③は『俱舍論』においても受け継がれ認められている。しかし、④に関しては、世親が認めずに別説を紹介している点がある。これに対し、有部の正統派と言われる衆賢は『順正理論』でまたそれに反論している。

2. ①の中、北伝有部の「未至定」と「静慮中間」とは、南伝上座部の註釈文献の *upacārasamādhi* (近行定) と *Abhidhamma* の「第二禪」とに相当するが、より下位の *khaṇikasamādhi* (剎那定) は、北伝有部及び他部派文献に見られないため、これは南伝上座部特有の思想であると言える。

3. ②③の中に「止行 (*śamathacarita*)・観行 (*vipaśyanācarita*)」という二種の行者に分けられる。有部の二行者である *śamathacarita*・*vipaśyanācarita* は、上座部の *samathayānika*・*vipassanāyānika* に近似す

るが、内容はかなり異なっていると見られる。つまり、有部の *śamathacarita* は「無色定」に至る行者であるが、上座部の *samathayānika* は「四禪」に至る行者である。一方、有部の *vipaśyanācarita* は「四禪」に至る行者であるが、*vipassanāyānika* は「四禪」より下位の定に至る行者である。この点から見れば、有部の *śamathacarita* と *vipaśyanācarita* とは共に「四禪」に到達しなければならないので、有部の止観の修習次第は「四禪」を前提としている。

4. 『俱舍論』以前の有部文献に見られない⑤「止観と修行法」は、止観の具体的な修行法を指定している。すなわち「不淨観 (*aśubha*)・出入息念 (*ānāpānasmṛti*)」は「止」, 「四念処 (*smṛtyupasthāna*)」は「観」の修行法である。これは、それまで指定されなかった止観の具体的な修行法を、世親が『俱舍論』で定めるようになったと考えられる。所属部派不明であり「六足・発智」と『大毘婆沙論』との間の時代に成立したと思われる『修行道地經』では「不淨観・出入息念」が「止」の修行法に指定されているが、「観」の具体的な修行法は見出されない。これだけでなく、修習次第も『俱舍論』に近似している。世親は『修行道地經』に見られるような「止」の具体的な修行法である「不淨観・出入息念」を採用し、さらに「観」の具体的な修行法である「四念処」を加えて『俱舍論』に記述したと考えられる。

5. 『成実論』では、止観をすべての修道の根幹をなすものであると重視している。さらに、止観が述べられる部分は、阿含經に見られるものをしばしば引用し、詳細に説明して解釈している。特に「三十七菩提分法」と「止・観」との対応が示されている。これは、他の文献に見られない『成実論』の止観説の特徴である。

略号及び参考文献

PTS = Pali Text Society

大正 = 大正新脩大蔵經

AKBh = *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, P. Pradhan (ed.), Patna: K. P.

Jayaswal Research Institute, 1967.

AN = *Aṅguttaranikāya*, R. Morris (ed.), A. K. Warder (rev.), vol. I, London: PTS, 1885, rep. Oxford: PTS, 1989; R. Morris (ed.), vol. II, London: PTS, 1888, rep. Oxford: PTS, 1995; E. Hardy (ed.), vol. III-V, London: PTS, 1897-1900, rep. London: PTS, 1976-1979.

Dhs = *Dhammasaṅgaṇi*, E. Müller (ed.), London: PTS, 1885, rep. London: PTS, 1978.

Pug = *Puggalaṭṭhānattī with Commentary (Paramatthadīpanī)*, R. Morris and G. Landsberg and C. A. F. Rhys Davids (ed.), London: PTS, 1914, rep. London: PTS, 1972.

SN = *Saṃyuttanikāya*, G. A. Somaratne (ed.), vol. I, Oxford: PTS, 1999; L. Feer (ed.), vol. II-V, London: PTS, 1888-1898, rep. London/ Oxford: PTS, 1976-1994.

Vibh = *Vibhaṅga*, C. A. F. Rhys Davids (ed.), London: PTS, 1904, rep. London: PTS, 1978.

Vis = *Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*, H. C. Warren (ed.), Dharmapala Kosambi (rev.), Harvard Oriental Series, Cambridge/Mass.: Harvard University Press, 1950, rep. Delhi, 1989.

Cousins, Lance S. [1984] "Samatha-yāna and Vipassanā-yāna," *Buddhist studies in Honour of Hammalava Saddhātissa*, Nugegoda: University of Jayewardeneupura, pp. 56-68.

Cousins, Lance S. [1996] "The Origins of Insight Meditation," *The Buddhist Forum IV*, ed. By Tadeusz Skorupski, New Delhi: Heritage Publishers, pp. 35-58.

Phrapongsak, K. [2007] 「*Nikāya* における止観の研究」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』29, 京都: 龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会, pp. 80-98.

Phrapongsak, K. [2009a] 「後代パーリ文献における止観」『仏教学研究』65, 京都: 龍谷仏教学会, pp. 51-77.

Phrapongsak, K. [2009b] 「く止行者・観行者」とく定について」『パーリ学仏教文化』23, 名古屋: パーリ学仏教文化学会, pp. 5-20.

青原令知 [1990] 「『婆沙論』の論述形態」『印度学仏教学研究』38-2, 東京: 日本印度学仏教学会, pp. 876-872.

小谷信千代 (他) [2007] 『俱舍論の原典研究: 睡眠品』東京: 大蔵出版.

鎌田茂雄 (他) [1998] 『大蔵経全解説大事典』東京: 雄山閣出版.

洪鴻榮 [2002] 「『俱舍論』における止観」『印度学仏教学研究』51-1, 東京: 日

本印度学仏教学会, pp. 372-369.

齋藤滋 [2008] 「説一切有部における「アビダルマ」—「大毘婆沙論」と「俱舍論」—」『印度学仏教学研究』57-1, 東京: 日本印度学仏教学会, pp. 350-344.

櫻部建 (他) [1999] 『俱舍論の原典解明: 賢聖品』 京都: 法蔵館.

櫻部建 (他) [2004] 『俱舍論の原典研究: 智品・定品』 東京: 大蔵出版.

佐々木閑 [2003] 「六足と「婆沙論」」『印度学仏教学研究』52-1, 東京: 日本印度学仏教学会, pp. 353-348.

大蔵経学術用語研究会 [2001] 『仏典入門事典』 京都: 永田文昌道.

西村実則 [1979] 「俱舍論の經典観の一考察」『印度学仏教学研究』27-2, 東京: 日本印度学仏教学会, pp. 724-726.

平秀道 (他) [1972] 「大毘婆沙論の総合研究」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』11, 京都: 龍谷大学仏教文化研究所, pp. 119-148.

福原亮敏 [1965] 『有部阿毘達磨論書の発達』 京都: 永田文昌堂.

森章司 [1980] 「部派仏教の修行道論」『日本仏教学会年報』45, 京都: 日本仏教学会西部事務所, pp. 19-37.

註

(1) 「施設論」4 (大正26.522a-523a)

(2) この部分は, *AN. 4. 10 Asura-vagga*

Sattāro 'me bhikkhave puggalā santo saṃvijjamānā lokasmiṃ. Katame cattāro?

Idha bhikkhave ekacco puggalo lābhī hoti ajjhataṃ cetosamathassa na lābhī adhipaññādharmavipassanāya, idha pana bhikkhave ekacco puggalo lābhī adhipaññādharmavipassanāya na lābhī ajjhataṃ cetosamathassa, idha pana bhikkhave ekacco puggalo na c' eva lābhī hoti ajjhataṃ cetosamathassa na lābhī adhipaññādharmavipassanāya, idha pana bhikkhave ekacco puggalo lābhī c' eva hoti ajjhataṃ cetosamathassa lābhī adhipaññādharmavipassanāya. Ime kho bhikkhave cattāro puggalā* santo saṃvijjamānā lokasmiṃ ti. (*AN. II. 92*) にも見られるが, この經典に相当する現存阿含経は存在しない。* puggalo を puggalā に訂正。

(3) 復次或有補特伽羅。得內心止不得増上慧法觀。或有補特伽羅。得増上慧法觀不得內心止。或有補特伽羅。不得內心止。亦不得増上慧法觀。或有補特伽羅。得內心止亦得増上慧法觀。何等補特伽羅。得內心止不得増上慧法觀。答若補特伽羅。得世間四靜慮。不得出世聖慧。何等補特伽羅。得増上慧法觀。不得內心止。答若補特伽羅。得出世聖慧。不得世間四靜慮。何等補特伽羅。不得內心止。亦不得増上慧法觀。答若補特伽羅。不得世間四靜慮。亦不得出世聖慧。何等補

特伽羅。得內心止亦得増上慧法觀。答若補特伽羅。得世間四靜慮。亦得出世聖慧。如說世間四靜慮相應。心住等住近住安住。不散不亂攝止等持。心一境性者。此顯內心止。如說出世聖慧所攝。於法揀擇極極擇最極擇。解了等了近了遍了。機黠通達審察聰敏。覺明慧行毘鉢舍那者。此顯増上慧法觀。是名奢摩他毘鉢舍那。(大正26.375c)

- (4) *Kathaṇ ca puggalo lābhi c' eva hoti ajjhataṃ cetosamathassa lābhi adhipaññādharmavipassanāya ?*

Idh' ekacco puggalo lābhi hoti rūpasahagatānaṃ vā arūpasahagatānaṃ vā samāpattinaṃ lābhi lokuttaramaggassa vā phalassa vā, evaṃ puggalo lābhi c' eva hoti ajjhataṃ cetosamathassa lābhi adhipaññādharmavipassanāya. (Pug.62)

- (5) 「近分定 (sāmantakasamādhi)」は「大毘婆沙論」からはじめて見られるが、定義は「俱舍論」定品において「一々の四禪・四無色定の前段階である」と解釈される。

kati punaḥ sāmantakāni |

aṣṭau sāmantakāny eṣāṃ

ekaikasyaikaikaṃ yena tatpraveśaḥ | (AKBh.447) :

玄奘訳「俱舍論」定品

「近分有幾。何受相應。於味等三為皆具不。頌曰。

近分八捨淨 初亦聖惑三

論曰。諸近分定亦有八種。與八根本為入門故」(大正29.149b) :

真諦訳「俱舍論」三摩跋提品「此近分有幾種。偈曰。彼定近分八。釋曰。

隨一一定。近分亦爾。依近分得入根本故」(大正29.301a)

- (6) 止と観とのバランスをとる「止観平等」に関して、これ以外は「大毘婆沙論」104智蘊「復次由三緣。故名三摩地。謂於所緣恒不捨故。任持種種勝善法故。令奢摩他毘鉢舍那住一所緣平等轉故」(大正27.539a) ; 141大種蘊「有說。若地奢摩他毘鉢舍那。平等攝受彼地有五通。近分無色隨一闕故無有五通」(大正27.727c) ; 149根蘊「問何故近分無色無通所依勝定耶。答奢摩他毘鉢舍那不平等故。非五支四支所成故。非樂道所攝故」(大正27.763c) などにおいて説かれる。

- (7) これらの術語の中、「未至定」と「静慮中間」は「六足・發智」からはじめて見られるが、これらのすべての定義及び関連性は「俱舍論」定品において詳細に解釈される。

①「未至定 (anāgamyasamādhi)」は「初禪の近分である」と解釈される。

ādyam sāmantakamanāgamyam (AKBh.448) :

真諦訳「俱舍論」三摩跋提品「最初近分定。名非至定」(大正29.301a)

※ 玄奘訳「俱舍論」定品にはこの部分が見当たらない。

- ②「近分定 (sāmantakasamādhī)」は「一々の四禪・四無色定の前段階である」と解釈される (註5参照)。
- ③「静慮中間 (dhyānāntara)」は「尋」のないものであり、初禪と第二禪との間にしかないものであるが、「近分定」は「四禪・四無色定」のそれぞれの直前段階にあるものである。

ekārtham āhosvin nānārthakam | sāmantakaṃ hi vairāgyamārgaḥ |
atarka dhyānamantaram || 22 ||

dhyānam eva hi vitarkāsaṃprayuktaṃ dhyānāntaraṃ dhyānavi-
śeṣatvāt | ata eva dvitīyādiṣu dhyāneṣu na vyavasthāpyate
viśeṣābhāvād iti | (AKBh.448) :

玄奘訳「俱舍論」定品

「中間靜慮與諸近分。為無別義為亦有殊。義亦有殊。謂諸近分為離下染是入初因。中定不然。

復有別義頌曰。

中靜慮無尋 具三唯捨受

論曰。初本近分尋伺相應。上七定中皆無尋伺。唯中靜慮有伺無尋。故彼勝初未及第二。

依此義故立中間名。由此上無中間靜慮」(大正29.149b) :

真諦訳「俱舍釈論」三摩跋提品「此中有說。名近分定。有說。名中間定。此二名為一義。為有別義。有別義。何以故。近分者是離欲道。偈曰。無覺中間定。釋曰。此定與覺不相應。說名中間定。與二定異故。由勝初定故。於初定中不立。於第二定等中。亦非所立」(大正29.301a)

- (8) 初禪から第五禪の「五禪」の記述は、*Dhs.* §180, 202, 205, 210, 213, 226などに見られる (paṭhamaṃ jhānaṃ ...pe... pañcamaṃ jhānaṃ) が、詳細に説明されない。「五禪」と「禪支」との関係が詳細に説明されているのは、*Vibh.* 12 *Jhāna-vibhaṅga* 3 *Abhidhammabhāṇaniya* における記述である。その中、「第二禪 (dutiyaṃ jhānaṃ)」の説明があり、以下ようになる。

Idha bhikkhu yasmiṃ samaye rūpūpapattiyaṃ maggaṃ bhāveti, avitakkaṃ vicāramattaṃ vivekaṃ pītisukhaṃ dutiyaṃ jhānaṃ upasampajja viharati paṭhavikasiṇaṃ, tasmīṃ samaye caturaṅgikaṃ jhānaṃ hoti : vicāro pīti sukhaṃ cittassa ekaggatā. Idaṃ vuccati dutiyaṃ jhānaṃ. Avasesā dhammā jhānasampayuttā. (*Vibh.*264)

- (9) channaṃ anussatiṭṭhānānaṃ maraṇassatiyā, upasamānussatiyā, āhāre paṭikūlasaññāya catudhātuvavatthānassā ti imesaṃ vasena laddhacittakaggatā, yā ca appanā-samādhinaṃ pubbabhāge ekaggatā : —ayaṃ upacāra-samādhī. Paṭhamassa jhānassa parikammaṃ paṭhamassa jhānassa anantara-paccayena paccayo ti ādi-vacanato pana yā parikammānantarā ekaggatā : —

ayaṃ appanā-samādhi ti evaṃ upacārappanā vasena duvidho. (Vis.85) ※
現存する漢訳「解脫道論」は「外行定」と漢訳されるが、*Visuddhimagga* と
比較して同じ箇所では *upacārasamādhi* が現れる。

- (10) channaṃ anussatiṭṭhānānaṃ maraṇassatiyā, upasamānussatiyā, āhāre
paṭikūlasaṇṇāya catudhātuvavatthānassā ti imesaṃ vasena laddhacitteka-
gatā, yā ca appanā-samādhinaṃ pubbabhāge ekaggatā : —ayaṃ upacāra-
samādhi. Pathamassa jhānassa parikammam pathamassa jhānassa anantara-
paccayena paccayo ti ādi-vacanato pana yā parikammānantarā ekaggatā : —
ayaṃ appanā-samādhi ti evaṃ upacārappanā vasena duvidho. (Vis.85)

- (11) *AN. 4. 17 Paṭipadā-vagga* 167-168

Catasso imā āvuso Sāriputta paṭipadā. Katamā catasso ?

Dukkha paṭipadā dandābhīṇṇā, dukkha paṭipadā khippābhīṇṇā, sukhā
paṭipadā dandābhīṇṇā, sukhā paṭipadā khippābhīṇṇā. Imā kho āvuso
catasso paṭipadā. Imāsaṃ kho āvuso catassannaṃ paṭipadānaṃ yāyaṃ
paṭipadā dukkha khippābhīṇṇā, imaṃ me paṭipadaṃ āgamma anupādāya
āsavehi cittaṃ vimuttan ti.

Catasso imā āvuso Moggallāna paṭipadā. ...pe... Imāsaṃ kho āvuso
catassannaṃ paṭipadānaṃ yāyaṃ paṭipadā sukhā khippābhīṇṇā, imaṃ me
paṭipadaṃ āgamma anupādāya āsavehi cittaṃ vimuttan ti. (*AN. II. 155*)

- (12) 「邪」を「耶」に訂正 (大正27.250註1 : 邪=耶【宋】【元】【明】【宮】参照)。
(13) 「邪」を「耶」に訂正 (大正27.250註1 : 邪=耶【宋】【元】【明】【宮】参照)。
(14) 玄奘訳「俱舍論」賢聖品

「道於餘處立通行名。以能通達趣涅槃故。此有幾種。依何建立。頌曰。

通行有四種 樂依本靜處

苦依所餘地 遲速鈍利根

論曰。經說通行總有四種。一苦遲通行。二苦速通行。三樂遲通行。四樂
速通行。道依根本四靜處生名樂通行。以攝受止觀平等任運轉故。道依
無色未至中間名苦通行。以不攝受止觀不等艱辛轉故。謂無色定觀滅止增。
未至中間觀增止減」(大正29.132a) :

真諦訳「俱舍論」聖道果人品「復次此道有時說名行。由此行至涅槃故。
此行有四種。如經言。有行苦遲智。有行苦速智。有行樂遲智。有行樂速智。
此中偈曰。依定道樂行。釋曰。於四定中此四種道。說名樂行。由攝分故。奢
摩他毘鉢舍那。平等起故。此道不由功用成故。說名樂行。偈曰。於餘地苦行。
釋曰。於餘地。謂非至定中間定無色定中。此道說名苦行。由不攝分故。奢摩
他毘鉢舍那不具故。大功用所成故。說名苦行。何以故。非至定及中間定。此
定由奢摩他不具。未至初定及二定故。無色定由毘鉢舍那不具。思想心細故。
此樂苦行」(大正29.283b)

- (15) 「四禪」の「止觀平等」に関して、これ以外は、*Samādhi Nirdeśa* 「sa hi samathavipaśyanābhyām yuganddhavāhitvāddṛṣṭadharmasukhavihāra uktaḥ sukhā ca pratipaditi |」(*AKBh.433*):玄奘訳『俱舍論』定品「止觀均行最能審慮。得現法樂住及樂通行名」(大正29.149b):真諦訳『俱舍釈論』三摩跋提品「此共奢摩他毘鉢舍那。雙生起故。故說為現法安樂住。及遲速樂行」(大正29.296c)などにおいて説かれる。
- (16) 平川索引により dvivadhō を dvividhō に訂正(櫻部建(他)[1999:247註1]参照)。
- (17) -tvāt tatra を -tvāt | tatra に訂正(櫻部建(他)[1999:247註2]参照)。
- (18) 玄奘訳『俱舍論』賢聖品「即此上流差別有二。由因及果有差別故。因差別者。此於靜慮由有雜修無雜修故。果差別者。色究竟天及有頂天為極處故。謂若於靜慮有雜修者。能往色究竟方般涅槃」(大正29.124c):真諦訳『俱舍釈論』聖道果人品「上流者。往上受生。是受生處。於中不般涅槃。流者行義。偈曰。此於定。雜修行無下。釋曰。是上流入。由因果有二種。謂由因由果由因者。有雜修定不雜修定為因故。由果者。阿迦尼師吒為勝。有頂為勝故。此中若人雜修定為因。則往生阿迦尼師吒。於彼般涅槃」(大正29.276b)
- (19) 玄奘訳『俱舍論』賢聖品「餘於靜慮無雜修者。能往有頂方般涅槃。謂彼先無雜修靜慮。由於諸定愛味為緣。此殞遍生色界諸處。唯不能往五淨居天。色界命終於三無色次第生已。後生有頂方般涅槃。二上流中前是觀行後是止行」(大正29.124c):真諦訳『俱舍釈論』聖道果人品「復次偈曰。餘行頂。釋曰。非雜修定上流入以有頂為勝。何以故。此人隨定定品起嘅味心。生一切處已。唯不入五淨居天。由次第受三無色處生。後往生有頂皆般涅槃。此是奢摩他行人。前是毘鉢舍那行人」(大正29.276b-c)
- (20) 玄奘訳『俱舍論』睡眠品「謂貪患蓋能障戒蘊。惛沈睡眠能障慧蘊。掉舉惡作能障定蘊。定慧無故於四諦疑。疑故能令乃至解脫解脫智見皆不得起。故唯此五建立為蓋。若作如是解釋經意。掉悔理應惛眠前說。以必依定方有慧生。定障亦應先慧障故。依如是理。有餘師言。此五蓋中。惛眠掉悔如次能障定蘊慧蘊。由此契經作如是說。修等持者怖畏睡眠。修擇法者怖畏掉悔」(大正29.110c-111a):真諦訳『俱舍釈論』惑品「釋曰由貪欲瞋患蓋。戒法聚破壞。由睡弱蓋。慧法聚破壞。由掉悔蓋。定法聚破壞。若定慧無則。於四諦起疑惑心故。解脫解脫知見破壞。由此義故。說五為蓋。於此執中與定法聚相違。掉悔蓋應在慧障前。是故餘師說。如其次第能破定聚及慧聚。何以故。經中說。若人修行定觀。怖畏睡弱若人修行簡擇法。怖畏掉悔」(大正29.264a)
- (21) 櫻部建(他)[1999:緒言 ii]参照。
- (22) *AKBh.337*:玄奘訳『俱舍論』賢聖品「正入修門要者有二。一不淨觀。二持息念」(大正29.117b):真諦訳『俱舍釈論』聖道果人品「入修由二因。不淨觀息念」(大正29.269c)

- (23) 玄奘訳『俱舍論』賢聖品「依已修成滿勝奢摩他。為毘鉢舍那修四念住。如何修習四念住耶。謂以自共相觀身受心法」(大正29.118c)；真諦訳『俱舍釈論』聖道果人品「説入修二法門已。由此二法門。若已得。三摩提。偈曰。修觀已成就。方修四念處。釋曰。為成就四諦觀故。次説修四念處。何以故。四念處通攝一切法故。能對治四倒故。云何作四念處觀。偈曰。身受及心法。由簡擇二相。釋曰。先由別通相簡擇身。次簡擇受心法。別相者。是彼各各自性。通相者」(大正29.271a)
- (24) 南伝上座部の註釈文献における止観の「業処」については、拙論 [2009a] [2009b] を参照していただきたい。
- (25) 鎌田茂雄 [1998: 182] 参照。
- (26) 現存『修行道地經』は、西晋の竺法護により訳出された『修行道地經』(AD. 284) とこれの異訳である安世高訳『道地經』(AD. 148-170) とがある(大蔵經學術用語研究会 [2001: 141] 参照)。
- (27) 安世高訳『道地經』神足行章「或時行者居前止便得觀。或時行者當得止觀居前得止。若行者止意已得應從觀得解。若行者觀已足當應從止得解」(大正15.235b-c)
- (28) この部分は、AN. 4. 17 *Paṭipadā-vagga* 170
 Idha āvuso bhikkhu* samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāveti, tassa samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bhāvayato bahulīkaroto saññojanāni pahiyanti anusayā vyantihonti.
 Puna ca paraṃ āvuso bhikkhu vipassanāpubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāveti, tassa vipassanā pubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti, bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bahulīkaroto saññojanāni pahiyanti anusayā vyantihonti. (AN. II. 157) この經典に相当する漢訳『雜阿含』560においては「若比丘比丘尼。坐作如是住心。善住心。局住心。調伏心止觀。一心等受分別。於法量度。修習多修習。已得斷諸使。若有比丘比丘尼。於我前自記説。我則如是善哉慰喻。或求是。名説初道。復次比丘比丘尼。正坐思惟。於法選擇。思量住心。善住局住。調伏止觀。一心等受。如是正向多住。得離諸使。若有比丘比丘尼。於我前自記説。我當如是善哉慰喻。或求是名第二説道」(大正2.146c-147a) と説かれるが、かなりな相違点がある。* bhikkhū を bhikkhu に訂正。
- (29) 「世」を「世間」に訂正(大正15.217註5: 世+間【宋】【元】【明】【宮】参照)。
- (30) 福原亮敏 [1969: 339] 参照。
- (31) 「増一阿含」20.7「爾時。世尊告諸比丘。阿練比丘當修行二法。云何二法。所謂止與觀也。若阿練比丘得休息止。則戒律成就。不失威儀。不犯禁行。作諸

功德。若復阿練比丘得觀已。便觀此苦。如實知之。觀苦習。觀苦盡。觀苦出要。如實知之。彼如是觀已。欲漏心解脫。有漏心無明漏心得解脫。便得解脫智。生死已盡。梵行已立。所作已辦。更亦不復受有。如實知之」(大正2.600b)。これに対応するのは、AN. 2.3 *Bāla-vagga* 10である：

Dve 'me bhikkhave dhammā vijjābhāgiyā.

Katame dve ?

Samatho ca vipassanā ca. Samatho ca bhikkhave bhāvito kam attham anubhoti ? Cittaṃ bhāviyati. Cittaṃ bhāviṭṭhaṃ kam atthaṃ anubhoti ? Yo rāgo so pahiyati.

Vipassanā bhikkhave bhāvitā kam atthaṃ anubhoti ? Paññā bhāviyati. Paññā bhāvitā kam atthaṃ anubhoti ? Yā avijjā sā pahiyati : rāgupakkiliṭṭhaṃ vā bhikkhave cittaṃ na vimuccati avijjupakkiliṭṭhā vā paññā na bhāviyati. Imā kho bhikkhave rāgavirāgā cetovimutti avijjā-virāgā paññāvimutti ti. (AN. I. 61)

(32) AN. 4.17 *Paṭipadā-vagga* 170 : 「雜阿含」560 (註28参照)。

(本稿は、2010年度龍谷大学沼田奨学金研究奨学金による研究成果の一部である)

キーワード 止観、定、四通行、五蓋、修行法